

「あの日から十年」

厚母 至眞子

二十十一年三月十一日、金曜日の午後

点いているだけのテレビは

国会での、議員のやり取りを放送していた

画面の中で揺れが起きた

すぐに切り替わった画面から

アナウンサーの急を告げる声

裏方の姿が見え隠れして、声も混じる

俯瞰するカメラの映像

海を見下ろす駐車場

車のドアに手をかけたり、離れたり

思い惑う男性の姿

繰り返される地震速報

盛り上がった海水が音も無く進む

田畑を覆って行進する水の一群

向かう先はどこか

つけっぱなしのテレビに見入る

その夕刻だった

母の急を知らせる介護施設からの電話

心は慌てふためくが

身体は思うように動かない

何とか、搬送された病院へ到着

呼びかけても、呼びかけても

母の意識は戻らない

日付が変わり、母はそのまま旅立った

娘二人と孫二人に見送られて

地震の影響を大きく受けて
東京の末娘は間に合わない

夜が明けた

母の故郷へ遺体を運ぶ段取りとなった

横たわる遺体に付き添って出発

心は高ぶっているが、身体は重い

睡魔も襲う

長寿の島、周防大島町へ

百五十キロの道を急ぐ

橋を渡ると、ほっとする景色があった

晴れた空も、青い海も、点在する島々も

以前通りだった

認知症を患う前の母は、いつも言っていた

「葬儀は要らない」と

故郷での野辺送りは

子供たち三人で話し合った結果だった

母に近い親戚だけで見送ろう

そう決めた時

母の喜ぶ顔が見えたようだった

母の死は、来るべき時に来たのだろう

九十五歳まで生きてくれたのだ

何と、子孝行の母ではないか

それでも、身内の死は

生きている人間を極限の疲労へと誘い込む

母が亡くなって二ヶ月半が過ぎた日も
テレビは、伝え続けていた
多くの犠牲者を出した
東日本大震災の悲しみを

母の中陰の法要の日
故郷の寺の御坊様は言った

「私たちの宗派では
亡くなったら、人はすぐに
仏様になるといいます
その
仏様の中に私たちは居るのです」

そうなのか
何かが私の中で、腑に落ちた

あの日から十年が経った
私は次の職場も定年退職した

母の死に
あの日東北の映像が重なる

墓参りは年に数回
墓前の海は今日も穏やかだ